



A I時代に必要とされるForward Deployed型人材



生成A Iの普及により、情報収集、要約、分析、資料作成といった業務は、その大半の工程をA Iに任せられるようになりました。では、人はこれから何をすればいいのか。専門性や管理力だけに頼っているのは、A I時代に生き残っていく上では心もとない。近年注目されるF D E (Forward Deployed Engineer) のように、全体像を構想し、専門性を活かしつつ、自身がフロントに立って実現まで導いていけるような人材が求められるようになっていくのではないのでしょうか。

「Forward Deployed型人材」の本質は、単に机上でものを考え、提案するところで留まるのではなく、顧客の現場に入り込み、課題を具体的に特定し、ソリューションを実装して使えるところまで持っていくことにあります。

A Iは、必要な知識を教えてくれたり、選択肢を提示してくれたりするところでは、かなりの精度で答えてくれます。しかし、実際の現場には、既存業務との衝突、関係者の納得、運用上の細かな制約など、人が解決しなければ前に進まないような問題が数多くあります。ここで価値を発揮するのは、そのラストワンマイルを担える「人」なのです。

「専門性」だけでも「管理力」だけでも足りない理由

従来は、特定分野に通じた「専門家」と、マネジメントを専門に行う「管理者」、そして、両者の下で実働を担う「実務者」というように、役割を分業して行うことが効率的だとされてきました。しかし、これからの時代は、それぞれの役割の相当部分が、A Iを含む「デジタルレイバー」に代替されるようになります。A Iでもできることでは差別化が難しくなり、代わって、役割と役割の間で要する調整能力が競争力を左右するようになっていきます。

そこで、あらためて注目されるのが「ゼネラリスト」です。必要な専門性を「ゼネラル」に持ちながら、他領域に踏み込んでいき、相手を巻き込みながら前進させていけるような人材です。専門家ほど深い知見はないが、かといって単なる「何でも屋」でもなく、境界をまたぎながら構想を実装へつないでいく、そんな人材像なのです。

「ネオゼネラリスト」が担うForward Deployed型の役割

インソースでは、こうしたあたらしいゼネラリスト像のことを「ネオゼネラリスト」と呼んでいます。ネオゼネラリストとは、異なる専門や立場をつなぎ、高い視座と現場視点を往復しながら構想を描いていく人であり、その構想を自分自身で前に進めていける人のことです。これはまさにForward Deployed型人材が現場で行っている行動そのものではないのでしょうか。

「S a a Sの死」や「コンサルタント不要論」に惑わされない

最近では、A Iが進化していけば、そのうちS a a Sもコンサルタントも不要になる、という極端な言説も見られます。しかし実際にA Iにその役割を担わせて、自力で価値創出まで完遂できる人や組織はそれほど多くはありません。やはり使い勝手の良いツールや気の利いたサポートに対するニーズは今後も存在し続けるものと考えられます。

そうしたサービスを提供する際に、顧客がちゃんとメリットを享受できるところまで伴走できることが

生き残りのカギを握るのであり、それこそがまさにForward Deployed型人材なのです。

ネオゼネラリストがこれからのキャリアモデルとなる

組織の中の職階で定義される「ポジション」をベースにしたキャリアパスは、これからの時代においては機能しづらくなっていくと思われます。なぜなら、価値を生むのは職種や階層を越えて活躍していく人材であり、「どのポジションにつくか」よりも「どんな価値を創出する人になるか」が目指すキャリアモデルとなっていくからです。

株式会社インソース より

【M&A速報、コラムを日々配信！】X（旧Twitter）で情報を受け取るにはここをクリック

【M&A Online 無料会員登録のご案内】6000本超のM&A関連コラム読み放題!!
M&Aデータベースが使い放題!!登録無料、会員登録はここをクリック